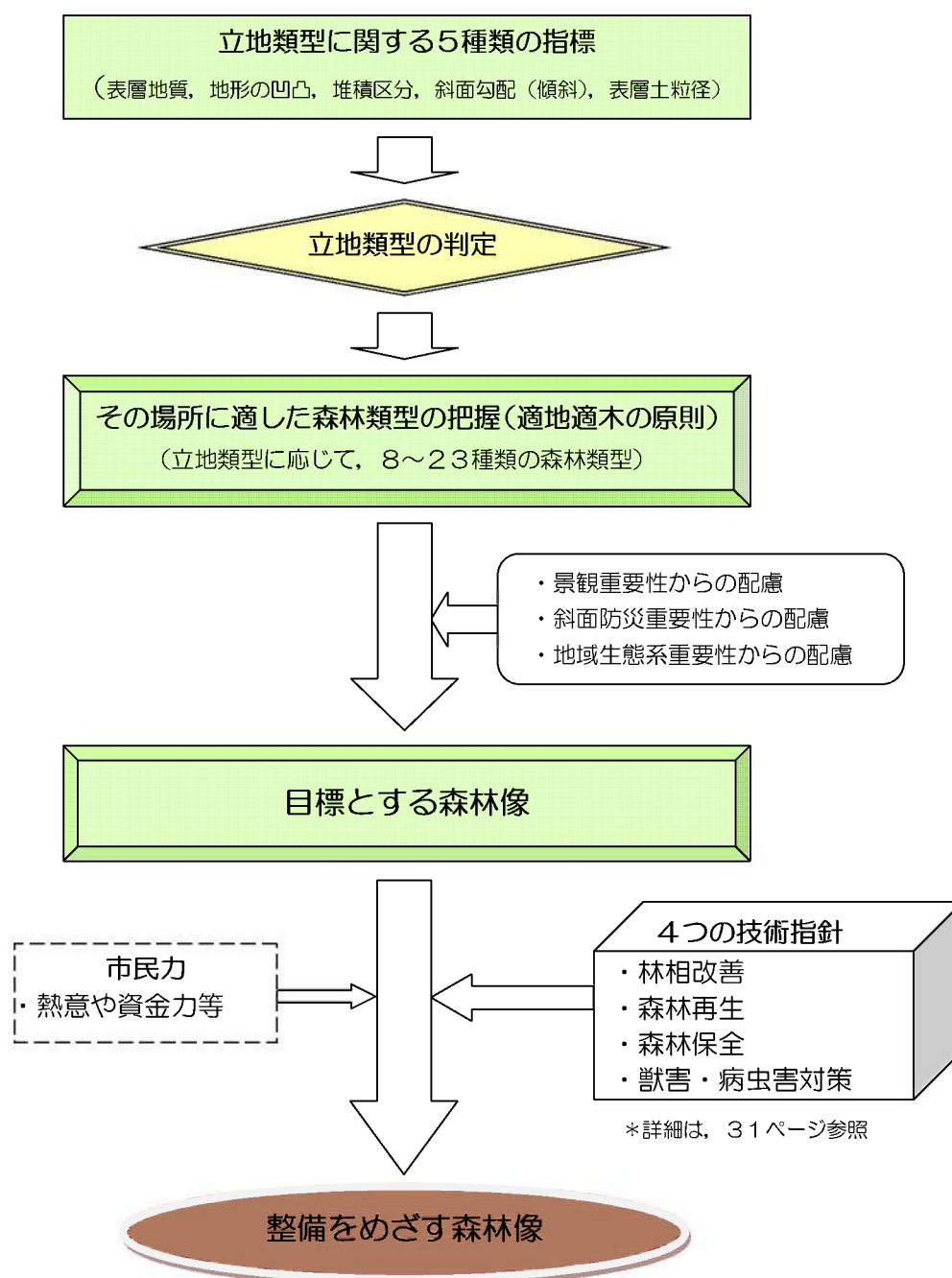


第6章 「整備をめざす森林像」決定までのプロセス

第4章では、三山の森林類型と立地類型との関連性を、第5章では、3種類の区域図を活用した配慮すべき事項を考慮し、目標とする森林像の選定ができることを解説しました。ここでは、具体例により、整備をめざす森林像の抽出に至るまでの過程を示します。

1 「整備をめざす森林像」を得るまでのフロー

「整備をめざす森林像」決定までのプロセスについて、フローを示すと下図のようになります。



2 「立地類型」の判定から「整備をめざす森林像」を得るまでの具体例

東山の大文字山で行われる「五山の送り火」の火床周辺地を例に、「立地類型」の判定から「整備をめざす森林像」を得るまでの過程を示してみます。

(1) 立地類型の判定

大文字山付近の対象地

- ・火床上部の尾根筋
- ・火床下部の平坦地～肩部

立地

土壌等の5つの指標	状 況
表層地質	泥岩（一部変成岩）
地形の凹凸	凸型
堆積区分	残積土
傾斜勾配（傾斜）	平坦
表層土粒径	粘性土

大文字付近 対象地



対象とする2箇所は位置が異なりますが、土壌等の状況は同じです。上表の内容を14ページの「立地類型区分表」に当てはめると、「1」の立地類型に該当します。

この立地類型に対応する森林類型は、下表のとおりとなっており、アカマツ林など8種類の森林類型が適地性が高く、世代交代が可能、又は一定の条件下で可能なものとなります。

立地類型 1 に対応する森林類型表（抜粋）

森林類型 (優占種林分)	項 目				
	現況植生*1	適地性*2	遷移段階*3	シカ害*4	病虫害*4
アカマツ林	+	+++	++	++	+++
ツツジ科低木林	++	+++	++	++	—
リョウブ林	+	++	++	+++	—
ヒノキ林	+++	+++	+++	++	—
コジイ林	++	++	+++	+	+
ソヨゴ林	+++	+++	++	+	—
ヤマモモ林	—	++	++	+	+
モウソウチク林	+	++	—	+	—

*1 現 況 植 生： 「+」が多いほど出現頻度が高いことを示し、「—」は三山では存在を確認していませんが、近傍の同一立地類型地で存在していることを表します。

*2 適 地 性： 「+++」はその森林がその場所で世代交代が可能、「++」は一定の条件下で可能、「+」は世代交代困難

*3 遷 移 段 階： 「+++」は極相、「++」は途中相、「+」は先駆相、「—」は遷移段階評価不要

*4 シカ害・病虫害： 「+」が多いほど、被害状況が大きいことを示し、「—」は重大な被害がないことを表します。

(2) 目標とする森林像の選定と実現

立地類型に対応する森林類型は、世代交代が可能な森林の主木の選択肢を示したものであり、この段階では、目標とする森林像が決まるものではありません。

目標森林像は、この主木の選択肢に、前述の重要性区分を加味して選定するものです。

また、各種の技術指針を踏まえ、森林景観づくりに取り組む側の事情に照らしたうえで、実際に整備をめざす森林像を求めていくことになります。

ア 「立地類型に対応する森林類型」の分析

現 況 植 生： ヒノキ林、ソヨゴ林が、高い頻度で存在します。この内、ソヨゴ林は、アカマツ退行林が粘土地で遷移した結果であり、本来目標とする森林には難があります。

適 地 性： アカマツ林、つつじ科低木林、ヒノキ林、ソヨゴ林は、その場所での世代交代が可能な森林として選定できます。

遷 移 段 階： 安定している森林類型は、ヒノキ林、コジイ林であり、この森林類型であれば、長期に安定した極相の森林となります。

シカ害・病虫害： 被害状況が大きい森林類型があるため、注意する必要があります。特に、アカマツ林の病虫害（松くい虫被害）は深刻です。

イ 重要性区域図を用いた景観形成価値等への配慮

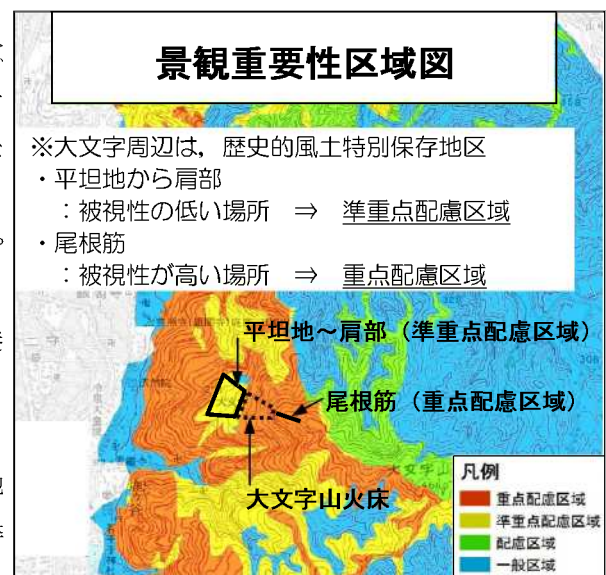
（景観形成価値への配慮）

尾根部は、景観重要性区域図で重点配慮区域であり、歴史文化的意味があるアカマツ林をそのシルエットで再生する適地になります。ただし、病虫害の程度が高いため、徹底した防除のほか、抵抗性マツの導入や周辺地の生存アカマツを排除したバッファゾーンの設定等の対策とともに、貧栄養状態の継続的な維持等の維持管理が必要となります。

また、大文字という歴史的風土を持つ地域でもあるため、準重点配慮区域は、四季の移り変わりを実感できる森林へと誘導します。

＊ マツ林保護のためのバッファゾーン

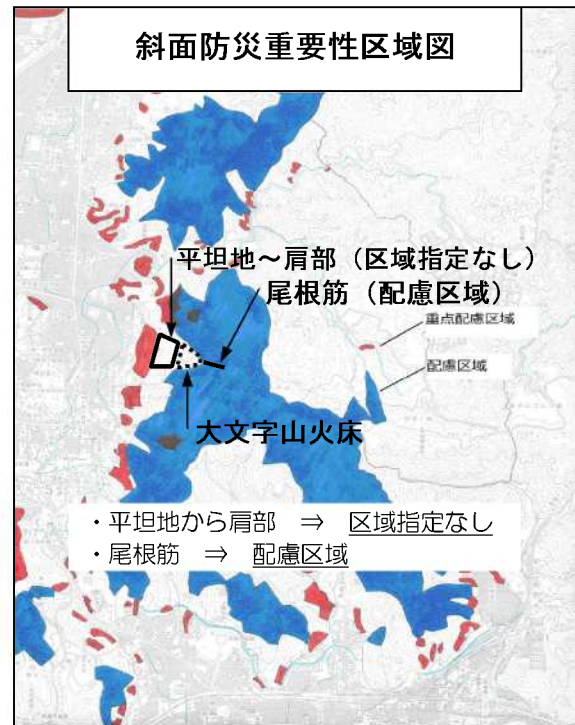
マツノマダラカミキリの飛来距離が、概ね2 kmと言われているため、対象地の半径2 kmの区域からマツをなくし、アカマツ林を守るための緩衝地帯とするもの。



(斜面防災的価値への配慮)

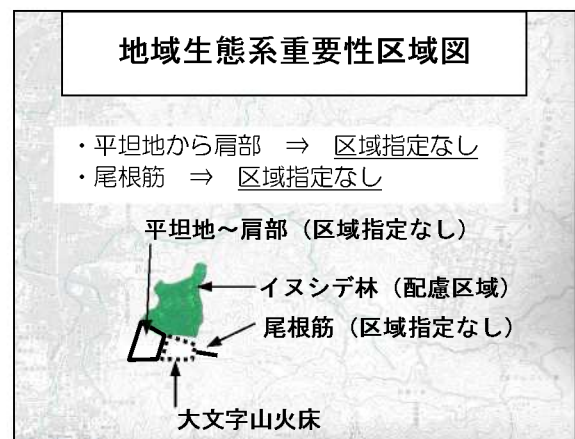
防災重要性区域図においては、尾根筋は配慮区域であるため、ヒノキ林を選定した場合においても、ヒノキの純林とせず、混交化することで下層植生を充実し、水源涵養性の向上や表土流出の防止の検討をする必要があります。また、混交林とすることにより、土壌緊縛力が向上し、植栽土壌自体が安定します。

また、ヒノキ林は遷移段階が極相「++」であり、安定した森林として、維持費用を節減する中で実現可能な森林となります。しかし、同程度に安定した植生が期待できるコジイ林を選択した場合は、暗い森林となりやすく、下層植生が充実しない場合が多分に想定されるため、好ましくはありません。



(地域生態系保全的価値への配慮)

地域生態系重要性区域図においては、平坦地から肩部、尾根筋とも区域指定なしですので、人手を入れることは可能です。ただ、隣接する北側は、イヌシデ林のバッファゾーンなので、隣接していることへの配慮として、対象地内に花崗岩基盤がスポット的にある場合は、イヌシデ林の縁部として、イヌシデを適地に苗木植栽することにより、バッファゾーンを保護する等は考えられます。

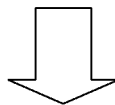


ウ 目標とする森林像とその実現に向けて

森林類型を求め、各重要性区域図を参考として、景観形成価値等への配慮を検討しました。

次に、検討のうえで、絞り込んだ候補の事例を示します。

尾根筋 目標とする森林像	アカマツ林の樹形がつくる、空を背景とする（スカイライン）景観は、歴史文化的にも重要な景観であるため、アカマツ林の再生を目標とします。 しかし、松くい虫被害に対する、徹底した駆除や抵抗性マツの導入、周辺へのバッファゾーンの設定に加え、貧栄養状態の維持（松葉掻きや下草刈り）が必要となります。
平坦地 目標とする森林像	平坦地での「適地性」が高いヒノキ林は、より自然な景観のヒノキ林とするために、秋に黄葉するアオハダ、アオダモや紅葉するヤマウルシ等の落葉広葉樹を加えた混交林とし、景観性及び公益性（水源涵養・防災への配慮）に優れ、長期に安定した森林を目標とします。



専門的な見地からの4つ技術指針（林相改善、森林再生、森林保全、獣害・病虫害対策）を必要に応じて用い、検討を行い、森林景観づくりに取り組む側の思いや人的な体制、資金面などの事情に照らしたうえで、実際に整備をめざす森林像を求めます。

＊ 目標とする森林像 針葉・落葉樹混交林

錦秋（紅葉が錦（にしき）のように色鮮やかな秋）の森とすることを念頭に、その色合いを考えると、赤・黄・緑色といった植物が織り成す色彩鮮やかな景観となります。この内、赤はモミジやイヌシデ、ヤマウルシ、黄色はアオハダ、アオダモが想定されます。